互いに手を取り合って

校　長　　武井　正明

一週間前の午前、同級生の彼（本稿で登場９/18、11/７）から「お久しぶりです。今日午後吉田中に居ますか？」と、突然嬉しい連絡が入った。

友人や先輩が仕事場に「ちょっと近くに寄ったから」と顔を出してくれるのは、本当に嬉しいものである。新任教頭時代、遠路田上や三条から小千谷南中まで、先輩方が「近くを通ったから」と訪ねてきてくれた。校長になっても、度々突然の嬉しい来訪があった。その度に勇気づけられ、やる気にまた灯が点くのである。

今回は、会社を経営している彼が、燕の運送会社に所用があり、そのついでに会社役員の方とふたりで来校してくれた。私はもう嬉しくてたまらない。大歓迎だ。

ゴルフ場ではなく、お互いスーツ姿での対面となると、雰囲気が全く違ってくる。
同級生が関心を寄せているのが、部活動の地域展開化について。彼は「まだ自分で考えているだけなんだけどさ…」と前置きしながらこう言った。

「もう、学校の先生に任せっぱなしの時代ではないのだから、我々企業で、例えば『部活動がある日の勤務は３時迄、土日に部活指導があった場合は、翌日の勤務は午後からとする』というような社内規定をしっかり作って、会社が社員の指導者を全面的にバックアップしてやる体制を作る。当然、社内の理解を得なければならないが、そういう企業が多く出てくれば、指導者になった人物は必ず人間的に成長して会社に戻ってくると俺は思うんだ。その社員が、仕事で会社に返す。それに、部活指導でできた、子どもや親との人間関係からも、またいい形でお互いにプラスに広がっていくと思うんだ」

会社役員の方も、県外のクラブチームで野球をやっていた経験から、当該市役所が様々な企業に呼び掛けて、少しでもクラブと仕事を両立させながら、地域貢献もできるような雇用形態を模索していた、それが過疎対策にもなっていたと話してくれた。

そして同級生は、いつも自社がどうしたら地域貢献できるかを考えている、と言った。
私は、そのような広い発想がなかったので、ふたりの話を聴いて感心するばかりだった。

今、部活動は全国的に、地域展開化に向けて過渡期にある。
官民ともに多くの知恵を出し合いながら、部活動がなくなる令和９年度９月に向けて、子どもたちが、より充実した成長期を歩めるように、取組を進めていきたいと思う。